

桐壺

どの帝の御代でしたか。女御や更衣がたくさん参内なさって
いたのですが、そんな中に、身分が特に高いわけではないにもか
かわらず、帝から格別のご寵愛を受けていらつしやる女性が
ありました。それ以前から、自分こそが中宮にと意気込んでい
らつしやつた女房の方々は、その方のことを当然目障りなもの
として見下し、そして嫉妬の炎を燃やしていらつしやるのでし
た。ましてや、その方と同じくらいのも、またはそれより低い身
分の更衣たちは、心中穏やかではありません。朝夕の宮仕えで
さえも、自分の意に反して他の女性たちの心を動揺させ、彼女
たちの恨みを買ってしまふ、そんな生活の積み重ねのせいだつ
たのでしよう、その方はひどく体をこわし、なんとなく心細そ
うな様子で実家に帰りがちになってしまいました。しかし、帝
は会えなくなればなるほど、ますます何か足りないお気持ち
にかられ、ますますその方を愛しい存在にお思いになります。
そして、周囲の非難を気にすることもできなくおなりになって、

のちのち語り継がれんばかりの異常なおもてなしぶりです。上達部や殿上人たちも、いたたまれず目を背けて「本当に見てられない帝のご寵愛ぶりですな。中国でもこういうことが起こったために、世の中が乱れて大変だったということですよ」などと言い、次第に宮の外でも、困ったことに民衆の悩み事にまでなつて、今にも楊貴妃の例までもが引き合いに出されそうな勢いです。このようにその女性にとつてはたいそう不都合なことが多かったのですが、おそれ多くもこの上もない帝のご愛情をたよりとして、宮仕えをお続けになつたのです。

この方の父である大納言はお亡くなりになつており、母は北の方、古くからの由緒ある家柄の方でいらつしやいます。ご両親とも健在の頃は、世間の評判も現在華やかな方々に少しも劣らず、どんな儀式をも立派に執り行われましたが、大納言の死後、とりたてて頼りになる後見人がいなくなりましたので、何か儀式のある時には、やはりよりどころがなく、心細いご様子でした。

それが、前世でもご因縁が深かつたのでしようか、帝との間

に世に類のないほど美しい玉のような男の御子様までもがお生まれになってしまったのです。帝は早く御子様をご覧になりたいと、いても立ってもいられなくなられ、急いで参内させ、ご覧になってみると、本当にすばらしい若宮のお顔立ちです。一の皇子は右大臣の女御のお産みになった方で、人々の期待を一身に背負い、疑いなく皇太子になるべき御子様として、世の中でも大切に考え申し上げていましたが、この若宮様の上品なお美しさには、到底並ぶべくもございませんでしたので、自然な帝のお心として、この若宮様だけを我が子のようにお思いになって、おかわいがりになることといつたら限りがありません。

たしかに若宮様の母君は、はじめから普通の宮仕えをなさるような身分ではありませんでした。世の評価もたいそう高く、上品な風情の持ち主でしたが、帝がやたらに側にいさせなさるあまりに人々の顰蹙を買ってしまうのでした。たとえば、宮中の音楽の宴の時や、その他大切な行事の時には、帝はまず最初にその方を参上させなさいます。またある時は、帝がお寝過ごしになったので様子をうかがいますと、その方を前夜からその

ままお側にお置きになつていたりなど、半ば強引にその方をお離しにならないのです。そんなことをなさつてゐる内に、その方はおのずから軽々しく見られるようになってしまいました。そして、この若宮様がお生まれになつてのちは、帝がさらにその方を溺愛なさるので、皇太子の座に、あるいはこの若宮様がおつきになつてしまふのではないかと、一の皇子の女御はお疑いになつてゐるのでした。この女御は誰よりも先に入内なさつた方なので、帝としては思い入れも格別、また御子様たちもいらつしやつたので、この女御のご忠告だけは、やはりお耳にいたく、辛くお感じになつたようでした。若宮の母君は、帝のおそれ多いお気持ちを信頼申し上げていましたが、自分を悪く言い、何か欠点を見つけてやろうとする者は依然として多く、心労から自分の体もすっかり弱り、なんとなく死んでしまいました。いような気持ちになつて、いつそのこと帝のご寵愛がなければなどというつまらぬ物思いまでなさるのでした。

その方のお部屋は桐壺にあります。たくさんの女性たちの部屋の前をお過ぎになりながらの頻繁な帝のお通いに、人々がお

心を乱されるのも当然に思われます。また、逆に桐壺から清涼殿へ参上なさることも、あまりに度重なる折には、誰かが打橋や渡殿のここかしこの道に、信じられないような細工をしたためでしょう、お送りやお迎えの人々の着物の裾が堪え難いほど汚れてしまったことなどもありました。またある時は、どうしても通らなければならぬ馬道の戸を閉め切り、こちら側と向こう側とでしめしあわせて、恥をかかせ、困らせなさることも多くありました。折に触れて数知れず苦しいことばかりありましたので、その方は本当にひどく思い悩んでしまいました。そんな姿を見ると、帝はますます可哀想に思われて、後涼殿にもとよりお住まいだった更衣のお部屋をほかにお移しになって、特別のお部屋としてお与えになりました。部屋を取られた者の恨みはもちろんやり場がありません。

この方の若宮が三つにおなりになった年のお袴着の儀式を、帝は一の皇子のお召しになった時に劣らず、内蔵寮や納殿にあつたものを全て尽くして盛大になさりました。そのことについても世の批判ばかりが多かったのですが、この若君の次第に大人

びていらつしやるお顔立ちやお心ばえがあまりにすばらしいので、人々は恨み通すことがおできにならないのです。そんな中でも仏の道をよくご存知の方は、「このようなすばらしいお方が、こんな現世に生まれておいでになるなんて…」と、何か恐ろしさまで感じているように目をみはつていらつしやるのでした。

その年の夏、桐壺の御息所つまり若君の母上は、あまりのむなしさに病をわずらい、里に下がろうとなさりましたが、帝はいとまを全くお許しにならないのでした。ここ数年、いつも病気がちでおられたので、帝はどこか見慣れていらつしやる部分もあつたのでしょうか、「やはり今しばらくはここで静養してみなさい」とおつしやるばかりなのです。そうこうしている内に、日に日に病が重くなられて、わずか五、六日の間に、ひどく衰弱してしまつたものですから、更衣の母君が泣く泣く帝に奏上しましたところ、ようやく帝は里下がりをお許しになつたのです。更衣はこの期に及んでも、あらぬ嫌がらせを受けるのではと心配になり、若君を宮中にとどめ申し上げて、隠れて宮

を後になさったのでした。

物事には限度というものがありませんから、帝はそれまでのように引き止め続けることがおできにならないかたなのですが、立場とお見送りさえかなわない心もとなさを、何と表現したらよいかわからなくお感じになつていらっしゃるようでした。とても美しくかわいらしかった更衣の顔がすっかりやせて、「本当に悲しい」と心で深く思いながら、実際言葉に出しても思うように申し上げられず、生きていいのか死んでいるのか、消え入るような姿でいるのをご覧になると、帝は過去も未来もお考えになれません。そして、様々なことを泣きながら約束なさるのですが、更衣はお答えも申し上げなさがることができないのです。目つきなどもひどくだるそうで、ますます力なく茫然自失のご様子で床に臥しているばかりですので、帝はどうしたらよいのかと思ひ惑わずにはいられないのでした。輦車の宣旨などをお出しになつても、いざ更衣の部屋にお入りになると、全く退出をお許しになることができません。帝が「限りあるという人生とはいえ、互いに先立たれたり、先立つたりすることはないと私たち

は約束したではないか。まさか私を捨てて行ってしまうことはないだろうね」とおっしゃるのを聞き、更衣も本当に辛い思いで帝の顔を拝見し、「限りとて別れる道の悲しきにかまほしきは命なりけり（いくら限りがあるとはいっても、お別れして死出の道に旅立つのが本当に悲しいのです。生きたいと願うのは私のこの命なのですから）本当にこのようにお別れの時が来ると存じておりましたら…」と、息も絶え絶えになりながらも、申し上げたいと思うことはおありのご様子なのですが、ひどく苦しげでだるそうでしたから、帝はともかくも成り行きを最後までご覧になるしかないとお思いになるのです。そこにお使いの者が訪れ、「本日始める予定でした祈祷の数々を、しかるべき方々がお引き受けになりました。さつそく今宵より」と申し上げ、更衣の退出を急がせるので、帝はどうしようもないほど辛くお思いになりながら、しかたなく里下がりを許可なさったのでした。

帝は御胸がふさがるようなお気持ちになって、全くまどろむこともできず、夜が明けるのをただお待ちになっているばかり

でした。お使いが行き交うわけでもないのに、やはり落ち着かないのでしよう、ご心配事をとめどなくおっしやっています。

「夜中を過ぎた頃にお亡くなりになりました」と言つて人々が泣き騒ぎましたので、それを聞いたお使いもたいそう気を落とすして帰参しました。その報告をお聞きになる帝の御心の乱れは、何が起きたのかも御理解できないほどで、お部屋におこもりになつていらつしやいます。帝としては若宮様のことを、このよくな状況においてもご覧になりたく思われますが、若宮様は、こんな時に帝のお側にいらつしやるのは例のないことでしたので、母のもとに退出なさろうとしました。何事があつたのかお分かりにもならず、おそばについている人々が泣き乱れ、帝も御涙をとめどなく流していらつしやるのを、不思議に拝見なさつていました。普通の場合でさえ、このような親子の別れが悲しくないことなどないのに、ましてこの若宮様のお姿は、お気の毒で言葉にもなりません。

別れを惜しむ時間にも限りがありますから、更衣の亡骸は宮中の作法にしたがつて墓所に納め申し上げたのですが、母であ

る北の方は、娘と同じ煙になって天に昇ってしまいたいと、泣いて別れを惜しみなさっていました。そして、御葬送の女房の車に乗りこみ、更衣の亡骸の後を追われて、愛宕という所でたいそう厳粛に葬送の儀式を行っている所にお着きになった時の母上のお気持ちは、いかばかりであつたでしょうか。

(中略：現代語訳中：しばらくお待ち下さい)

年月が経つても、帝が御息所のことをお忘れになる時はありませんでした。「お慰めに」と、しかるべき女性たちを帝のもとに参内させなさいましたが、「亡き人とならべて考えられる人さえ探すのも本当に難しい、この世の中であることよ」と、むなしさだけを全てにお感じになつてしまつていた折、先帝の四の宮で、御容貌がお優れになつていふ評判の高くていらつしやる、そしてまた母后がこの上なくおかわいがり申し上げなさつた方が帝のお耳に入つたのでした。帝にお仕えする典侍は、先帝の御代からの方で、四の宮にも親しく参内し

て馴染んでいましたので、四の宮が幼くていらつしやる時から
拝見し、また最近もちらと拝見したようで、「お亡くなりになつ
た御息所に似ていらつしやる人を…、私は三代にわたつて宮仕
えしてまいりましたが、そんな方を見つけ申し上げることなど
できませんでしたが、後の宮の姫君は、まあ本当によく似た女
性に成長されましたなあ。めつたにないほどお美しい方でござ
いますよ」と奏上したところ、「まことであるか」と、お心に
止まったようで、熱心に参内を促し申し上げなされたのでした。

すると母后は、「ああ、恐ろしいことよ。春宮の女御がひど
く意地が悪くて、桐壺の更衣が、露骨にぞんざいにもてなされ
た前例もありますから縁起でもない…」と、躊躇してしまい、
はつきりと決断をしない内に、母后もお亡くなりになってしま
いました。姫君が心細いご様子でいらつしやいますので、帝は
「本当に私の娘たちと同じように考え申しますから」と、とて
も熱心に申し上げなさいます。姫君のおそばにいる人々、ご後
見役たち、そして兄君でいらつしやる兵部卿の親王などは、

「このように心細い気持ちでいらつしやるよりは、宮中にお住

みになつて、お心を慰めるのも良いだろう」などとお思ひになつて、結局は姫君を入内させなされたのでした。

姫君は藤壺の部屋を与えられましたので、藤壺の女御とお呼び申し上げます。藤壺の女御のお顔立ちやお姿は、不思議なまでに桐壺の更衣にそっくりでした。しかし、この方はご身分が高かつたためでしょうか、なんとなく桐壺の更衣よりも立派に見え、人々もおとしめなさることができなかつたので、のびやかにふるまって心配はないのでした。あの桐壺の更衣は、人々が認めなかつた上に、帝のご寵愛があまりに深すぎたのに違いありませんね。それにしても、帝のお気持ち紛れるというほどではなかつたものが、次第にお心移ろいして、この上なく慰められるようになっていったというのも、なんとも人の心の不思議を感じさせるものでありました。

源氏の君は帝のおそばをお離れにならないので、足繁く帝のもとへお通いになる藤壺の宮は、他の者に比べてもいつそうお隠れになることができません。どの女性たちも自分が人よりも劣っているとお思ひになることはないでしょう、たしかに、み

なそれぞれとてもお美しいのですが、そうは言っても、みなそれなりに年を重ねていらつしやいます。藤壺の宮はその点、とても若くかわいらしくていらつしやるので、懸命に源氏の君の目をお避けになろうとしても、いつのまにか目に入ってしまうのでした。

源氏の君は、母君である御息所のことを、その面影さえ覚えていらつしやらないのですが、「本当によく似ていらつしやいますよ」と典侍が申し上げたので、幼な心にも、とても愛しく思い申し上げなきつて、いつでも藤壺の君のもとに参りたい、そしてお近づき申し上げて拝見していきたい、とお感じになるのでした。

源氏の君と同様に、帝もまた藤壺の宮に深い思いを抱いていらつしやり、「どうかうとましくお思いにならないでください。不思議と源氏の君があなたを母のようにお慕い申し上げるに違いないという気がするのです。どうか源氏の行動を無礼だとはお思いにならないで、可愛がつてはいただけませんか。お顔立ちや目の表情などが本当に桐壺の宮によく似ているのですから、

実の母のように見えなざるのももつともなことなのです」などと申し上げなされたので、源氏の君は、幼な心にも、はかない花や紅葉にまで御自分のお気持ちを表し、藤壺の宮にますますお心を寄せ申し上げなさるのです。そんな御様子を見て、弘徽殿の女御は、藤壺の宮とも御仲がぎくしゃくしていたこともあつてか、以前の桐壺の女御に対する憎さまで沸いてきて、ひどく不愉快にお感じになつていようでした。

帝でさえ比べる者がないと拝見なさり、世間でも名高くていらつしやる源氏の君のご容貌はと言えば、やはりその魅力はたとえようもなく可愛らしくいらつしやつたので、人々は源氏の君のことを「光る君」と申し上げるようになりました。一方、藤壺の宮も源氏の君とお並びになるほどの帝のご寵愛を受けておりましたので、人々は「輝く日の宮」とお呼び申し上げるのでした。

(中略…現代語訳中…しばらくお待ち下さい)

婿取りの作法は世に例がないほど立派におもてなし申し上げなさりました。左大臣は源氏の君がとても若くおいでなのを、おそろしいほどかわいいとお思い申し上げなさっていました。女君は少し年長でいらつしやったのですが、婿君がたいそう若くていらつしやるので、自分には似つかわしくないのではないかと気が引ける思いでいらつしやったのです。

この左大臣のご信任がとても厚い上に、母宮が帝と同じ母后のお生みになった方でいらつしやるわけですから、当然、父方、母方ともご立派です。その上、この源氏の君までがこのように婿君としてお加わりになったので、東宮の御祖父で、最後には世の中を治めなさるはずだった右大臣のご威勢は、敵対するまでもないくらいに押さえつけられなさったのでした。

源氏の君は、帝がいつもお呼びになって近くにいきさせるので、気楽に私邸で過すこともおできになります。心の中では、ただひたすら藤壺の宮のご様子を、比べる者がないとお慕い申し上げて、「あのような人をこそ妻にしたいものだなあ。似た方もいらつしやらないし……。左大臣の姫君は、たしかに美しく、

大切にされている方だとは思われるけれど、どうも心にしつくりこない」とお感じになり、幼な心がただ一人の人に取りつかれたようになって、ひどく苦しきを感じるまでになっていらつしやるのでした。

(中略：現代語訳中：しばらくお待ち下さい)